

終末主日礼拝説教「おお、牧場は…？」

日本基督教団石神井教会 2019年11月24日

【旧約聖書日課】エレミヤ書 23章1～6節

1「災いだ、わたしの牧場の羊の群れを滅ぼし散らす牧者たちは」と主は言われる。2それゆえ、イスラエルの神、主はわたしの民を牧する牧者たちについて、こう言われる。

「あなたたちは、わたしの羊の群れを散らし、追い払うばかりで、顧みることをしなかった。わたしはあなたたちの悪い行いを罰する」と主は言われる。

3「このわたしが、群れの残った羊を、追いやったあらゆる国々から集め、もとの牧場に帰らせる。群れは子を産み、数を増やす。4彼らを牧する牧者をわたしは立てる。群れはもはや恐れることも、おびえることもなく、また迷い出ることもない」と主は言われる。

5 見よ、このような日が来る、と主は言われる。

わたしはグビデのために正しい若枝を起こす。

王は治め、栄え

この国に正義と恵みの業を行う。

6 彼の代にユダは救われ

イスラエルは安らかに住む。

彼の名は、「主は我らの救い」と呼ばれる。

【使徒書日課】ヨハネの黙示録 1章4～8節

4、5ヨハネからアジア州にある七つの教会へ。今おられ、かつておられ、やがて来られる方から、また、玉座の前におられる七つの霊から、更に、証人、誠実な方、死者の中から最初に復活した方、地上の王たちの支配者、イエス・キリストから恵みと平和があなたがたにあるように。

わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放してくださった方に、6わたしたちを王とし、御自身の父である神に仕える祭司としてくださった方に、栄光と力が世々限りなくありますように、アーメン。

7 見よ、その方が雲に乗って来られる。

すべての人の目が彼を仰ぎ見る、

ことに、彼を突き刺した者どもは。

地上の諸民族は皆、彼のために嘆き悲しむ。

然り、アーメン。

8神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」

【福音書日課】ヨハネによる福音書 18章33～40節

³³そこで、ピラトはもう一度官邸に入り、イエスを呼び出して、「お前がユダヤ人の王なのか」と言った。³⁴イエスはお答えになった。「あなたは自分の考えで、そう言うのですか。それとも、ほかの者がわたしについて、あなたにそう言ったのですか。」³⁵ピラトは言い返した。「わたしはユダヤ人なのか。お前の同胞や祭司長たちが、お前をわたしに引き渡したのだ。いったい何をしたのか。」³⁶イエスはお答えになった。「わたしの国は、この世には属していない。もし、わたしの国がこの世に属していれば、わたしがユダヤ人に引き渡されないように、部下が戦ったことだろう。しかし、実際、わたしの国はこの世には属していない。」³⁷そこでピラトが、「それでは、やはり王なのか」と言うと、イエスはお答えになった。「わたしが王だとは、あなたが言っていることです。わたしは真理について証しをするために生まれ、そのためにこの世に來た。真理に属する人は皆、わたしの声を聞く。」³⁸ピラトは言った。「真理とは何か。」

ピラトは、こう言ってからもう一度、ユダヤ人たちの前に出て来て言った。「わたしはあの男に何の罪も見いだせない。³⁹ところで、過越祭にはだれか一人をあなたたちに釈放するのが慣例になっている。あのユダヤ人の王を釈放してほしいか。」⁴⁰すると、彼らは、「その男ではない。バラバを」と大声で言い返した。バラバは強盗であった。

雲に乗って来られる方

ローマ教皇が昨日から来日されて、カトリック教会の方々は大変な喜びのようです。もちろん、教皇の来日に注目しているのは、カトリック教会の方々だけではありません。昨夕は、教皇が羽田空港に降り立つ様子を、各局テレビが実況で伝えていたようです。38年前に来日された教皇ヨハネ・パウロ二世は、「空飛ぶ教皇」と呼ばれるほど世界中を巡られました。今回来日されている教皇フランシスコは、「ロックスター教皇」と呼ばれているようで、訪問した先々で熱狂的な歓迎をされているようです。東京と長崎で「教皇ミサ」を挙行されますが、昨日の北支区学習会でお会いした信徒の方は（もちろん教団の信徒です）、ご家族がカトリックだからということで「わたしもミサに参列するんです」と嬉々としてお話しくださっていました。世界13億人のカトリック教会を一つにする役割を負われた教皇がその責任を果たすというのは、こういうことなのでしょう。

黙示録を記したヨハネは、自分の見せられた天上の幻を述べ始める前に、主イエス・キリストがおいでくださるときのことを思い描きながら、まず、こう記しました、「見よ、その方が雲に乗って来られる。すべての人の目が彼を仰ぎ見る…」と。飛行機に乗って来られた方も、その方を見ようと「ミサ」を心待ちにしている人たちも、本当に見ようと願っているのは、あのお方、主イエス・キリストなのでしょう。一人のお方、主キリストをお迎えし、すべての人と共に、主を仰ぎ見る。教会を一つにする使命に生きる教皇を迎える人たちが、本当に願っているのは、そのことなのでしょう。その願い、その祈りに、わたしたちは、「教皇ミサ」に加わらなくても、心を合わせることができはるはずで。

「王なのか？」

今日は、教会暦では一年一巡り最後の主日（日曜日）で、「終末主日」と呼んでいますが、最近「王であるキリストの主日」とも呼ばれるようになりました。

キリストのことを、わたしたちは「主」とお呼びすることはありますが、「王」とお呼びすることはあまりないかもしれません。そもそもわたしたちの生きるこの時代は、もはや多くの国で「王」が支配するような時代ではありませんから、わたしたちにはピンとこない、ということもあるでしょう。ヘンデル作曲の「メサイア」で「王の王、主の主」（I テモ 6:15）と歌うことはあっても、実際には、キリストを「王」のイメージで考えることは滅多にないのです。

それは、現代人には当然のことなのかもしれません。もはや、聖書が記された時代とは違うのだからキリストを「王」として考えるようなことは必要ない、という見方も一理あるのかもしれません。それでも、なお現代にあっても、「王」に相当する地位に立たされている存在があるということも、否定できないでしょう。その存在が、「支配者」として権力を行使しないとしても、なお一つの「権威」を帯びた存在としてあるということは、確かだからです。

主イエスが、ローマ軍の百人隊長の願い出を聞いて僕をいやされた逸話がありました（ルカ 7:1~10）。百人隊長は、自分の部下である僕のいやしを願いますが、自分は主イエスを自宅に迎えることができるような者ではないと言って、ただ遠くからでも「ひと言おっしゃってください」、そうすれば僕は癒されるでしょう、と伝言しました。百人隊長は、ローマ皇帝を頂点とする権威のもとで職務を遂行する人間でしたから、権威を認めた関係の中で発せられた言葉の重みを、知っていたのです。その百人隊長の姿勢を知って、主イエスは「言っておくが、イスラエルの中でさえ、わたしはこれほどの信仰を見たことがない」（ルカ 7:9）とおっしゃられたというのです。

福音書日課（ヨハネ 18 章）で主イエスに「お前がユダヤ人の王なのか」と繰り返して問いかけている総督ピラトもまた、ローマ皇帝の権威の下に置かれた人でした。映画などで描かれるピラトをご覧になられた方もあると思います。彼は、しばしば、冷酷暴虐な総督として描かれるようです。当時のユダヤ人歴史家ヨセフスが、ピラトをそのように伝えているからです。けれども、わたしたちが福音書を通して知るピラトは、むしろ合理的で争いを好まない組織人のように見えるのではないのでしょうか。総督は、「王」を称する者が廃された地域に派遣された、皇帝の全権を委任された統治者です。その総督ピラトが、犯罪人として連れて来られた男に「お前が王なのか」と繰り返して問うというのは、不思議なことです。それは、ピラトが、目の前の男、主イエスに対して、何らかの「権威」を認めざるを得なかったからかもしれません。権威の下に置かれた人間として、「権威」を常に敏感に意識しながら生きていたからこそ、目の前の存在に対して「権威」を認めることになったのではないのでしょうか。

主イエスがおいでになられたときに、「権威」を認めるために、わたしたちも、「権威」ということに鈍感でいてはいけないのかもしれません。

もはや恐れず、おびえず、迷い出ることなく

旧約日課（エレミヤ書 23 章）では、預言者エレミヤが、あの理想の王ダビデと同じ正義と恵みにあふれた王が、新たに起こされるといふ預言を告げています。エレミヤは、主イエスの時代よりも 600 年も前、当時のユダ王国がバビロンの侵攻を受けて滅びつつあるときに活動した預言者です。エレミヤの念頭には、今の王国が滅んだ後、いつの日か、神のご計画によって、実際に世俗の王国を治める王が新たに立てられるとの希望があったでしょう。実際には、そのような世俗の独立王国は、ユダヤ人が期待したような形で再建され、存立していくことにはなりません。それでも、ユダヤ人は、信仰をもってこのエレミヤの預言を捨てることなく、繰り返し聞き返してきました。そして、キリスト者たちにも受け継がせたのです。

エレミヤは、王たちのあり方、別言すれば王としての「権威」のあり方を、牧者（羊飼い）と羊の群れの関係をたとえとして、告げました。羊飼いは、羊の群れの世話をし、守り導き、迷い出るものがないようにするとき、羊飼いとして羊にも認められるのです。羊飼いが世話をせず羊を弱らせたり、気にかけることをせず迷い出させたりしてしまったとしたら、羊飼いと羊の間には何の関係もなくなってしまうでしょう。羊は、自分の世話をしてくれる羊飼いをこそ認め、自分たちを一つの群れの中に留めるために気をかけてくれる羊飼いにこそ権威を認め、そこに留まり続けるのです。そのような関係、羊飼いの権威を、王としてのあるべき姿として、たとえて告げているのでしょう。

わたしたちが知っている羊の姿は、絵本の中のかわいらしい小羊のイメージにすぎないかもしれません。か弱い小羊。それは、わたしたち自身の姿。そのか弱い小羊を優しく抱いてくださるのが、主イエス・キリストなのだ、こどもさんびかの「小さな羊」を思い出しながらイメージするかもしれません。

実際の羊は、かなり自分勝手な動物のようです。小羊はともかく、成長すると乱暴な行動をする場合も少なくありません。勝手に動き回って、群れから迷い出てしまうことは日常茶飯事。だから、今でも、羊飼いは馬に乗り、牧羊犬を何頭も従えて、絶えず群れがバラバラにならないよう動き回らなければならない。それが、実態のようです。

それはまさに、わたしたち人間の姿なのでしょう。世の中だけでなく、教会の中でも、それは同じです。わたしたちが羊の群れだと言うのは、わたしたちが相当地に自分勝手な一人ひとりだということなのです。しかし、そのような群れを、羊飼いは世話をし続け、配慮し続け、一つの群れとして保ち続ける。

ある羊飼いが語っていました。羊飼いになるための最初の訓練は、自分が羊になりきって羊に仲間だと認めてもらえるようになること。羊の一人として認めてもらって初めて、羊飼いは羊の群れを導く「権威」を与えられるのでしょう。

主イエスも「小羊」として来られ、わたしたちの「羊飼い」になられました。それはまた、わたしたちも「羊」として養われながら、いつか「羊飼い」の働きを共に担うように招かれている、ということでもあるのです。